

# 被災者に寄り添う

東京電力福島第1原発事故に伴う避難者らの再起に向けた歩みを支えるには、再び笑顔を取り戻してもらおうと寄り添う思いや、人と人とのつながりが欠かせない。東日本大震災から3年がたち、県外からの支援者らの目に福島はどう映っているのか。それぞれの立場で「福島のあるべき姿」などを模索し、見守る人たちをリポートする。



「福島県民一人一人の深い痛みを理解しているのか。日本人はもう一度考え直すべきだ」と話す倉本さん

「福島が直面した震災、原発事故から3年という時間への率直な思いは。

「短いはずだが長い。短いはずだが…。日本人は本当に物忘れする。そのことに愕然とする。何一つ解決していない。先日、南相馬市で富良野GROUP公演『マロース』を上演した時、大熊町の牧場経営者と話す機会があった。マロースは鳥インフルエンザの話で、鳥の殺処分で鶏舎がつぶれる経営者の話が出

て、その言葉から語り出した。風化への懸念、便利さや豊かさを追求する現代社会への警鐘。倉本さんの言葉から震災、原発事故以後に問われる福島、そして、日本の姿が浮かび上がる。未曾有の災害に直面する福島を幾度も訪れ、被災者に語り掛け、震災と原発事故をテーマにした演劇の創作を続ける倉本さんの目の映る、福島の姿とは何か。本県の現状、復興に歩む県民に寄せる思いなどを聞いた。

か

は原発事故で牛が殺処分された話を聞いた。経営者は泣く時間もなかったということだった。東京の人間、理屈だけを論じている人間が果たして、福島県民の一人一人の深い痛みを理解しているのか。津波で家が流された、放射能で家に戻れないなど、日本人が共有しているのか。僕は忸怩たる思いだ」

「日本人は、福島の痛みを忘れてしまったのか。

——原発事故後の国の原子力政策をどう評価するか。  
「(役者やソナリオライターを養成した私塾) 富良野塾の塾生が一人、原発労働者として福島第一原発で働いている。先日『マロース』を鑑賞するため、いわき市から南相馬市まで来てくれた。髪が真っ白になつて瘦せて

うところに帰着するのだと思ふ。日本人の物の考え方はそのことがベースになっている。原発事故は今後も起こり得るという状況の中で皆真剣に考えていいようのように思える。東京の人間はチエルノブイリほどの強い危機感を、福島に対して持っていない。福島と聞くと東京まで怖いイメージを抱く外国人がいるのに、日本人はそれをも持たない。現実にそのことが渦巻いている。日本人はもう一度考え方すべきだ

という話で、一日の労働時間はたった15分。給料も決して高くない。汚染水問題でボロが出て、(廃炉作業の)現場が何一つ解決していないのに、総理大臣が原子力の技術を輸出するとなぜ言えるのか。輸出は考え方によつては非核三原則にも背くことになるのではないか。核をばらまくことにつながるのではない。人間が性悪になつていると、どのように悪用されるか分からぬ。倫理観を伴わない科学が出てきた。昔の科学者はプラトンとしてもアリストテレスにし事故が二度と起こらないと断言できなかつて(原子力を推進